



病院トツプの  
Cool Head, but Warm Heart  
経営者魂  
Vol. 82

社会医療法人松涛会  
理事長  
斎藤妙子

夫で前理事長の斎藤正樹氏とともに60年以上にわたり、地域に必要な医療、介護を提供し続けてきた。正樹氏の逝去に伴い、2020年、理事長に就任。今年6月、90歳を迎え、ますます意気盛んだ。

「一人ひとりが望む生活を支える」  
をモットーに医療、介護の  
一貫サービスを提供する

撮影=重光紀代子

# 90歳。まだまだ、やってみたいことがたくさん



## PROFILE

さいとう・たえこ ● 1957年、共立女子大学生生活科(食物)を卒業し、斎藤正樹氏と結婚。83年、医療法人松涛会理事。86年、社会福祉法人松涛会理事。2001年から14年まで副理事長。20年から社会医療法人・社会福祉法人松涛会理事長。そのほか、下関市社会福祉協議会理事、下関市医療対策協議会委員等。

——理事長就任から4年が経過しました。どのように感じていますか。

**斎藤** グループの社会福祉法人と併せて、8施設55事業所に約1100人の職員が働いています。背負ったものが大きいのですが、前に向かって進まなくてはいけません。「医療・介護・福祉の連携により地域社会に貢献いたします。くあなたの喜びが、私の生きがいです」の法人理念に沿って、職員と力を合わせて進みます。

理事長就任時は、ちょうど新型コロナウイルス感染症が猛威をふ

るっていたころです。私たちの法人は、地域のなかで生かされてきましたから、一日でも早く確実に、安全に地域の人たちのワクチン接種を行いたいと考えました。土日・祝日でも出勤を希望する多くの職員が接種に懸命に取り組んでくれました。「ああ、ちゃんと理念を理解してくれているな」とうれしくなりましたね。

——前理事長の時代から、高齢者ケアに注力していますね。

**斎藤** 1960年に医院を開設後、前理事長とともに米国や欧州を視

察しました。ナーシングホームなども見学し、前理事長は「これからは高齢者ケアが重要だ」と経営の方向性を決め、81年に現在の場所52床の病院を開設しました。

私も、ナーシングホームは素晴らしいと思い、86年に社会福祉法人を開設しました。私が主に福祉分野を担当したのですが、知らないことばかり。職員とともにいろいろ勉強しました。日本では養老院と呼び、職員は寮母さんです。

利用者さんの誕生日には、その方のご希望を聞いてその方が一番食べたいものをお出しする。お寿

司、鍋物、炭火で焼いたイワシ等。楽しかった。

ホスピスも96年に開設し、わが国で55番目の認可を受けました。最初は12床から、現在36床です。20年間で約2720人の方々との出会いがありました。

職員だけでなく、多くのボランティアの方々を支えられてきました。それらが「自分らしく生きる」ということを考えるきっかけになったと思います。

——長女が院長、長男が常務理事になり、斎藤理事長を支えています

## Q&A 10問10答

**Q1** 自分の性格をひとりで  
言い表す?

何でもやってみたい。知りたい。

**Q2** 弱点を1つ教えてください。

思いつきが出て物が捨てられない。

**Q3** 最近うれしかったことは?

①患者さんから食事がおいしいと言われたこと。相手が嬉しいと自分も嬉しい。②職員や患者さん、患者さんのご家族等、皆さんが癒しの庭で癒され、笑顔になったとき。

**Q4** 今はまっているものはありますか?

萩の夏ミカンで皮の砂糖漬けに実でマーメイドをつくること。

**Q5** タイムマシンがあったら  
行きたいのは過去? 未来?

決め切れない。過去にも未来にも行ってみたい。

**Q6** 人生で最も影響を受けた人は?

「実るほど頭が下がる稲穂かな」を戦後、小学6年生の卒業式に話して頂いた校長先生の言葉。

**Q7** 日課はありますか?

食事の準備。食材を買って、作り、盛り付けて、と考えるのがいいですね。

**Q8** 人生最後に食べたいものは?

みんなと一緒に口から食べられたら素晴らしい。

**Q9** 今一番会いたい人は誰ですか?

大事な人が多くて、一人に決められません。勉強会で共に学んだ北海道から四国、九州の友達が頑張っていること。下関にも楽しい友達がたくさんいます。

**Q10** 病院トップとしてふさわしい素養は?

みんなが幸せになるために、どうしたらいいか考えられる人、人間らしい人。

### ● 社会医療法人 松涛会

## 医療、介護が一体となった サービスを展開



山口県下関市で、社会福祉法人と共に8施設55事業所で医療・介護が一体となったサービスを展開する。1960年に斎藤医院開設後、81年に安岡病院開設。96年にホスピスを開設し、地域ニーズを先取りした事業展開が特色。また、2021年に多世代交流の場として横野自治会と共同し、キッチンまよう開設。22年に社会医療法人認定(山口県内で3番目)、24年に臨床栄養師研修施設認定となる。

すね。

**斎藤** 医師を含めた医療従事者の働き方改革は、経営者にとって困難な時代になりました。

医療は男社会ですし、長女もまだ若いから、大変でしょう。

医師こそ患者さんの生活を見る必要があると思っています。患者さんにとってどんな生き方が幸せなのか、考えてほしい。ホスピスに来る患者さんのなかには、「医師がもっと早く決断していたら患者さんが望む生き方を支えられたのに」と、残念に思うことがあります。

今回、診療報酬と介護報酬で病院と介護施設の連携が評価されました。私たちがやってきたことは間違いではなかったとうれしくな

りました。

小規模多機能やグループホームは、それ自体だと経営は難しい。けれども、治療やリハビリが終わった人の受け入れ先としてとても重要です。「病院の関連施設として機能するグループホーム等の必要性の意味がやっとわかった」と、特に医師は、退院後の受け入れ先がある強みを理解されたように感じます。

——長年、医療や介護にかかわってきて、提供する側として何が大切だと考えていますか。  
**斎藤** 2024年6月末、オランダへ研修に行きました。認知症の人や障がいを持つ人が農場で働いたり、生活する施設にラウンジや

レストラン、洋服屋、美容院等の一般のお店が入り、生き生きと暮らしていて、素晴らしいと思いました。「社会的、身体的、感情的な問題に直面したときに適応し、本人主導で管理する能力としての健康」を意味するポジティブヘルスの考え方が浸透しているのに、感銘を受けました。

日本は高齢になると「自分はどうしたいか、してほしいか」意見を言わない風土がありますが、変えていかないといいけません。

自治会と始めた「キッチンまよう(子ども食堂)」は、親や祖母も来て、子どもと一緒に食事をする多世代交流の場であり、子どもの居場所となっています。この取り組みはいいなと思います。

私は、大腿骨骨折を左右2回経験しました。リハビリでは患者さんの見本になっていました。「きついけど、リハビリしたほうがいいよ」と患者さんを励ましたり。一人ひとりが自分の望む生活を送るには、健康が大事ですし、どうしたいか自分で意見を言うことが大切。そんな場所をつくるために、まだまだやりたいことはあります。いろいろなことを楽しんでチャレンジしていきたいですね。